

に挺身した。この殊勲の将兵は地元編成の特設警備隊第二〇中隊（宮城清昌中尉、現大東糖業専務）の池原万栄少尉と輜重兵第廿八聯隊の将校、下士官三名だった。師団では武功抜群なりとして賞詞を授け、全部隊に布告した。

池原中尉は復員後現在嘉手納農協長をつとめているが、当時を回顧して次の如く語っている。

「地上に待機中の数機の友軍機のうち、端の一機が煙を吹き出した。放っておくと次々に炎上する虞れがあると判断、咄嗟に飛び出して真ん中の機を押し出した。外に数名の将校と兵が協力してくれた。その時は無我夢中だったので、敵機が上空にいるかどうかも気にならなかった。軍人として当り前の事をしただけだが、数日後師団司令部から呼び出されて一瀬参謀長から賞詞を授けられ、大いに面目を施した」

白昼の飛行場作業は池原少尉らの挺身敢闘を生んだが、空中戦では彼の実力の相違が暴露され、将兵の士気に影響するところが少くなかった。

（註）賞詞は兵団長（師団又は旅団長級）が出す一種の表彰状のようなもので、感状よりは一段低い、感状は原則として軍司令官以上、又は

独立師団長（例えば小笠原兵団長のような方面軍や軍に属せず、大本営直轄の団長）しか出せない。

(5) 宮古島から沖繩へ兵力増援を企図

第十方面軍では第三十二軍の攻勢を支援するため地上兵力の増援を計画、宮古島から歩兵数個大隊を小舟艇で沖繩本島へ輸送する案について準備研究を先島集團長に命じた。別資料によれば機帆船五十隻、大型舟艇八十隻を使用することになっていた。集團では陸路参謀が中心となつて船舶工兵隊長らを交えて実施方法を研究したが、当時戦艦大和のような不沈艦と云われた巨艦でさえも沖繩近海に近寄ることが出来ず、途中で撃沈された一事に徴しても明かの如く、制海制空権は完全に米軍に握られ、文字通り蟻の這い出る隙間もない程封鎖されて居り、全く実施不可能の状態であった。間もなくこの計画は中止されたが、陸路参謀は全く無茶なことを云ってくるので、板ばさみになって困ったと、戦後の回想で語っている。

第八章 全島を震撼せしめた艦砲射撃

(1) 英太平洋艦隊出現

四月は空襲に明け、空襲に暮れ五月に入った。この頃の沖繩戦局は最高潮の激しさを加え、日本軍はジリ押しに押され、敵の先鋒は卅二軍司令部の立てこもる首里城に迫りつつあった。日本軍は戦略持久の方針を

堅持して、昼間は洞窟内にひそみ、夜間斬り込みによる肉迫攻撃を反復強襲、戦車に対しては爆雷を抱いての体当たり攻撃を敢行、敵上陸軍に多大の出血を強要したが、物量を誇る米軍の猛攻に抗する能わず、次第に後退、島の南部地区に迫りつめられつつあった。軍は五月四日九州、台湾からの特攻に呼応して首里前線一帯に於て一大攻勢を実施したが、陸海空よりの敵猛砲火に阻まれ、死傷者続出、一日で攻勢を中止するの止

むなきに至った。日本軍は爾来一切の攻勢を中止して六月廿二日の玉砕まで専ら防禦戦に終止した。

第卅二軍が攻勢に転じた五月四日宮古島は英太平洋艦隊による艦砲射撃を蒙り、全島を震撼せしめた。

この艦砲射撃を実施したのは沖繩作戦で先島方面の哨戒攻撃を担当したローリングス大将の指揮する英太平洋艦隊（戦艦キングジョージ五世戦艦ハウ、空母インドミタブル、ビクトリアス、インデファティガブル、イラストリアス、巡洋艦スイフトシューア、ガンビア、ブラックプリンス、アーゴノート、ユーリアラス、駆逐艦十一隻、計廿九隻）のうちのキングジョージ五世（マレー沖で日本軍に撃沈されたプリンス、オブ、ウエールズの姉妹戦艦）を基幹とする戦艦二、巡洋艦五、駆逐艦十一、計、十八隻と記録されている。

英艦隊宮古島近海に接近の報は同日早朝関係部隊へ伝えられたが輸送船を伴わないところから推して、上陸作戦の虞れなしと判断された。この日朝からさしも熾烈を極めた連日の空襲もピタリと止み、敵機がさかんに上空を旋回しているのが目撃された。敵艦隊接近の報は一般住民に知らされなかったため、人心の動揺は見受けられなかったが、何かあるとの感じがされたようだ。果せるかな午前十一時頃宮古島西南方数マイル沖に出現した英艦隊は同十五分、一斉に砲門を開きおおよそ卅分にわたつて三五発の巨弾を中、海軍、西の三飛行場に撃ち込んだ。いんいんたる砲声と巨弾の炸裂音は全島を揺るがした。事情を知らない一般住民は艦砲射撃の次に来るべきものは上陸だとばかり、色を失ない、慌てて防空壕に逃げ込む者、家族相ようして死を覚悟するなど、不安動揺いちぢるしいものがあった。

英艦隊は閃光を放ちながら悠々と射撃を続け、しばらくして南方へ姿を没したが、白色の艦隊は嘉手刈、宮国沿岸からハッキリ目撃された。

集團司令部では各種の情報通信を綜合した結果、単なる威嚇射撃の域を出ないと判断していたので、城辺町の友利砲台（十四サンチ海軍砲二門）及び嘉手刈入江砲台に対して応射を禁止した。これは敵上陸前に砲

台の位置が暴露することをさけるためと、敵の射撃が緩慢でさしたることはない」と判断したのによるものだった。

この艦砲射撃は島民に大きなショックを与えたが、損害は軽微に止まった。中飛行場に落下したもののうちには不発弾がかなりあり、想像していたような破壊力は発揮せず、結果的には一種のコケ脅しに終わった。早朝から上空を旋回していた敵機は弾着の観測連絡にあたっていたもので、艦隊の避退にもなつて退去した。

最初にして最後の艦砲射撃であったが、一時は上陸の前ぶれではないかと軍官民の色を失なわしたものである。

一資料によれば沖繩で日本軍が攻勢に転じた戦局の局面新展開に応じ、連合軍が日本軍の関心を宮古島に向けさせるための云わば一種の陽動作戦とみてよいようだ。

これについて陸路参謀は戦後の回想で「当時の状況では機動部隊が輸送船団を伴わないからと云って直ちに上陸の算なしと断定することは出来なかった。従つて或いは敵が上陸を企図しているのではないかとの見方も強かった。私自身も輸送船団が後方からついて来る公算が大きいとして一時は真険にその対策を考えていた、司令部の空気はかなり緊迫していたように覚えている」と述べている。

(2) 米・宮古島攻略作戦中止

四月二十六日米太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督は宮古島攻略作戦の無期延期を命じた。

米軍の南西諸島方面攻略の段階は

第一段階 沖繩本島南部（慶良間島および慶良間列島を含む）攻略

第二段階 伊江島の攻略、沖繩本島北部の制圧

第三段階 沖大東島、久米島、宮古島、喜界島、徳之島

の攻略に分けられていた。

第三段階では久米島だけが航空警戒網拡大のため六月二十六日米軍が

上陸したが、その他の攻略作戦は実施されなかった。

宮古島などの攻略を延期した理由は次のようである。

沖繩本島に上陸後米軍は沖繩本島を偵察した結果、長距離爆撃機（B29）の飛行場適地があることをニミッツ大将に報告した。

ニミッツ大将は統合参謀本部（会議）に宮古島攻略中止を献言し、四月二十六日攻撃の無期延期が通知された。

なおこのほかに第三段階作戦使用に予定されていた第五海兵軍団が硫黄島作戦で甚大な損害を受けたことも多少原因するかと推察される。

このような米軍の南西諸島攻略作戦が変更されたことは大本営はもとより現地軍側の窺い知るところとならなかったため、先島集団では米軍の上陸を予想して戦備を急いでいた。

(3) 先島集団を才十方面軍直轄に

空襲は五月一杯も間断なくつづけられ、一資料によれば同月の来襲延べ機数は二千機を越えた。この頃からは市街や非軍事施設に対する無差別爆撃が本格化し、非戦闘員や家畜の被害が目立つようになった。平良の市街は連日の集中爆撃と民家や公共建物の一部が兵舎に充てるため取り壊されたため、周辺部の一部を残し、殆んど破壊又は焼失し、廢墟と化していた。

沖繩の戦斗は五月下旬に入るや絶望的な様相を呈し、第三十二軍司令部は二十七日首里を放棄して南部に落ち延びた。大本営では第三十二軍の先島集団に対する指揮能力は事実上喪失したものと認め、指揮系統の混乱を防ぐため、三十日先島集団を第三十二軍の指揮下から外し、第十方面軍（台湾）司令官の直轄とした。同時に大東島守備隊（歩兵第三十六連隊基幹、田村権一大佐、十九年七月第二十八師団の隷下を離れて第三十二軍司令官の指揮下に入る）は七月四日（別資料によれば六月七日）第二十八師団に復した。又海軍警備隊も五月三十日を以て沖繩方面海軍根拠地隊（大田実司令官）から離れて高雄海軍警備府司令官の指揮下に入った。

(4) 乙戦備下令、兵力を集結

先島群島に対する敵上陸の懸念は五月から六月一杯つづいた。第三十二軍は五月十八日米軍の増援部隊に関する中央の緊急放送として次の参謀長電を先島集団に通報した。

諸情勢ヲ綜合スルニ敵ハ沖繩方面ノ現戦況ニ関連シ二十日前後沖繩本島方面ニ対シテ強力ナ増援乃至奄美大島就中喜界島状況ニヨリ先島方面等ニ新ニ上陸ヲ開始ノ算大ナリ ソノ兵力ハ二箇師団内外ト算定ス海軍側も五月十五日南西方面に敵が新たな作戦を開始する兆候があることを認めている。

この報に接し奄美地区では全地域に甲号戦備を下令、対陸上戦斗を準備したが、先島集団では特別の措置をとらなかつた。二十日になって沖繩本島に対する増援の動きと判明、上陸の危機は回避されたが、六月に入るや敵の先島方面に対する上陸の動きが顕著になってきたので、第八飛行師団ではこれに備えるため、沖繩に対する航空作戦を中止し、兵力温存をはかった。

先島集団では敵の上陸乃至は空挺部隊による宮古島攻略の企図が濃ゆいとして六月二日乙戦備を下令した。麾下各部隊は洞窟陣地の整備、弾薬、糧秣の洞窟陣地搬入、戦斗準備など戦備を強化、敵来攻に備えたがこの時点では未だ陣地構築は所望の域に達していなかつた。

納見集団長はこれ迄の島しよ防禦戦の戦訓などに徴し、兵力の分散配置は徒らに各個撃破を招き、持久の目的に副わないとの判断から伊良部島の独立混成第五十九旅団主力を宮古島に移動させ、兵力を集結をはかった。これは集団長の決断によるもので、配置変更後第十方面軍司令官に報告しただけに止めたようである。先島集団の防禦戦法については集団長に一任され、第三十二軍及び方面軍は極力干渉や指示を避けた、従って兵力の配置転換は集団長の裁量に委され、人事についても臨時的な措置

置は如何なることでもその権限内で行使することが出来たようである。

伊良部島の防衛は昭和十九年九月以降独混第五十九旅団が担任、兵力は旅団司令部、歩兵三個大隊（一個大隊は独混第六十旅団長の指揮下に入り、東地区に配置）砲兵一個中隊、工兵一小隊、有線無線一小隊、野戦重砲兵一個小隊（協力）で、独歩第三九四大隊が佐和田部落、第三九三大隊が国仲、第三九六大隊が伊良部部落に位置、旅団司令部は国仲部落に置かれ、下地島及び伊良部島南岸を上陸予想地点に選定、同方面に重点配備すると共に長山高地（標高八十八メートル）に野戦重砲十五センチ榴弾砲三門を秘匿、平良方面に上陸する敵を背後から攻撃する手筈になっていたが、集団命令により主力は六月始め機帆船、舟艇等によって宮古島平良港に転進、北地区の守備に就いた。この海上機動は敵砲戒機目をかすめて夜間を利用して行なわれ、くり舟迄も動員された。この輸送は輜重兵第二十八聯隊が担任した。主力の転進後は独歩第三九六大隊長竹内隆大尉の指揮する伊良部支隊（およそ歩兵一個大隊基幹）が残り、同島の守備に任じた。同支隊の伊良部島防禦についての方針は次のようなものである。

- (一) 下地島を主体に数多くの偽陣地（偽兵配置）を構築し、敵の主要攻撃を同方面に誘致し挺身斬り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。
- (二) 伊良部東海岸の水際を堅固に占領し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦斗を有利ならしむ。

（註）本項は独歩第三九六大隊長竹内隆大尉の資料による。

伊良部島を撤し平良町に転進した独混第五十九旅団長多賀少将は北地区隊長富沢大佐（歩兵第三十聯隊長）に替って北地区隊長となり、歩兵第三十聯隊を併せ指揮して同地区の守備を担任した。これに伴ってさきに同旅団から離れて独立混成第六十旅団長の指揮下に入り、東地区（城辺町）平安名岬一帯に配置されていた独歩第三九五大隊（脇本幸男大尉）は同旅団に復帰、北地区の守備兵力は大巾に強化された。第五十九旅団の平良町転進後の配置は次の通り。

旅団司令部 添道

揮下に入った。

- 独歩第三九三大隊 西原
- 〃 第三九四大隊 大浦
- 〃 第三九五大隊

なお余談だが、配備変更に伴って混成旅団長の指揮下に入れられた富沢大佐（歩兵第三十聯隊長、北地区隊長）はこの措置に強い不満を抱いていたようで、爾後旅団長との仲がシククリせず、旅団司令部と聯隊本部との間に摩擦対立を生ずる場合もあったと云われる。

(5) 六月も空襲さかん

六月中における宮古地区に対する空襲状況は左記の通りで延べ二千機を越した。

一日から十日迄	八三三機
十一日から十四日迄	三七〇〃
十五日	六十〃
十八日	八十四機
十九日	六十六機
二十日	六十〃
二十一日	百機
二十二日	五十八機
二十三日	六機
二十四日	四十四〃
二十五日	十〃
二十六日	四十三〃
二十七日	三十九〃
二十八日	三十九〃
二十九日	三十九〃
三十日	三十九〃

敵機の攻撃目標は主として飛行場に向けられたが、一部は陣地、兵舎民間建物、部落等にも向けられ、人畜の被害もかなり出るようになった。

二十二日第三十二軍との通信連絡は杜絶、沖繩戦の終末近きを思わしめた。